

《資料名》豊穰池の桜

ぼくの学校では、毎年4月になると「念仏の森」に遠足に行く。念仏の森は豊穰池の周りにたくさんの桜が植えられている広場だ。毎年春になると念仏の森はたくさんの人でにぎわっている。

明日は楽しみにしている遠足だ。豊穰池の桜も満開らしい。ぼくたちは、そこで新しく入ってきた1年生を迎える会をするのだ。ぼくが毎年楽しみにしているのは、何と言っても満開の桜。桜が舞い散る中でみんなでお花見をしながらお弁当を食べるのだ。

昨年の遠足でも、桜は見事な満開だった。念仏の森までの道中、田んぼの中のおたまじゃくし、野原のたんぼぼ、つくし、近所の家の子など、いろいろな生き物に出会いながら歩いていくのだ。

念仏の森への道は山の木々に囲まれた薄暗い坂道になっている。その坂道を進むにつれてみんなの足どりもだんだんと重くなる。

「まだ着かないの?」「疲れた〜。」「あとどれくらい?」

入学してきたばかりの1年生もしんどそうな顔をしている。しかし、しばらく歩いていてふと顔を上げると、目の前に見事なピンク色の桜が広がってくる。この瞬間が毎年楽しみになった。

ぼくは昨年の遠足のことを思い出しながら、胸を弾ませて明日の遠足の準備をした。

すると、となりの部屋からおばあちゃんがやってきた。

「おや、あきら。明日の遠足の準備をしているのかい?」

おばあちゃんはぼくのとなりにすわって話しかけてきた。

「うん。明日も天気はいいみたいだし、とっても楽しみだな。」

「それは楽しみだね。豊穰池の桜も満開だといいね。」

「先生が下見に行ったみたいだけど『今年も満開の遠足になりそうだよ』って言っていたよ。」

ぼくがおばあちゃんにそう言うと、おばあちゃんの顔がほっとしたように見えた。

ぼくは少し不思議に思ったけれど、遠足の準備を続けた。するとおばあちゃんは豊穰池の桜の話始めた。

「あの桜はね、いまから20年くらい前におばあちゃんや地域の人たちが植えた桜なんだよ。」

「えっ? そうなの?」

「そうだよ。当時は豊穰池の周りは何もなくてね、桜の木もなかったんだよ。豊穰池の周りもほとんど整備されていなくて、今と比べるとさみしいところだったんだ。」

よ。だから地域の人が集まって豊穰池の周りに桜の苗木を植えたんだよ。あの頃植えた桜の木はあきらの背よりもまだ低かったし、無事育ってくれるか心配だったけど…。ここがたくさんの人が集まる憩いの場所になるようになってね。」

おばあちゃんはそう言って隣の部屋に戻っていった。

次の日、青空が広がり絶好の遠足日和になった。ぼくは昨日のおばあちゃんの話を出しながらか念仏の森へ出発した。

念仏の森に到着すると、地域の方がぼくたちの到着を待っていた。ぼくたちが念仏の森で遠足をするときには、いつもいろいろな準備をしてくださっている。1年生を迎える会を始めて歌や出しものをした後、地域の方がお話をしてくれた。

「今年も無事、満開の桜の木の下で遠足ができてよかったです。」

薄ピンクの花びらがひらひらとぼくの目の前で舞った。ぼくはしばらくその花びらをながめた。